

# 子ども・青年期の若者・高齢者の地域協働 への係わりについて

張 静\*・今田寛典\*\*

Participation and Engagement of Regional Collaboration of Children,  
Youth of Adolescence and Elderly  
JING ZHANG and HIROFUMI IMADA

## 要約

昨今、地域協働によるまちづくり活動が多くみられる。行政だけでは、また地域住民だけでは解決できない地域課題について、相互が協力して解決に向けて活動する。たとえば、住民自治協議会（地域によって呼び方は異なる）には住民、組織、団体、行政が参加している。また、課題毎に地域協働が組織され、活動する場合もある。そういった中子どもや青年期の若者、さらに高齢者の個々が地域協働にどのように係われるかに関する研究は多くはない。そこで、本研究は子ども、青年期の若者、高齢者がいかに係われるかについてまちづくりを事例に実証研究した。

なお、本論文は、2018年社会情報研究科に提出した学位論文（張，2018）を抜粋、要約したものである。

## キーワード

地域協働 (regional collaboration), 子ども (children), 青年 (youth of adolescence), 高齢者 (elderly), まちづくり (town development), 参加・参画 (participation and engagement)

## はじめに

社会的サービスの授受関係から考えれば、子ども・青年期の若者<sup>注)</sup>・高齢者は社会的サービスを受ける側、その他の年齢層は社会・経済活動を通して社会的サービスを提供する側に大別できる。今後、提供側である担い手不足が深刻な問題として認識されており、こ

注)：青年期の定義はさまざまであるが、発達心理学では青年期は14, 5才から24, 5才（新村，2018）とされている。女子は12, 3才から22, 3才とされている。中学生も青年期の初期段階である。本論文で対象とする青年期は22, 3才までの大学生としている。

---

\* 北京中陸匯能科技有限公司

\*\*広島文化学園大学社会情報学部

れまでのサービスを受ける側も地域協働の担い手として活動することが期待される。

また、地域の伝統、文化、慣習等の伝承から考えれば、高齢者は伝承者であり、子ども、青年期の若者は継承者である。子どもは学習を伴いながらの活動、青年期の若者は実践を通しての協働活動が期待できる。しかしながら、子ども、青年期の若者、高齢者の地域協働への参加・参画に関する研究は、管見の限り多くない。

少子超高齢化、人口減少が急激に進展している地方においては地域協働に期待する部分はますます大きくなってきている。こういった地域事情の中で子ども、青年期の若者、高齢者はどのような立ち位置を考えればよいのか。

現在、地域協働はまちづくりに不可欠なものとして捉えられている。行政だけでは、また地域住民だけでは解決できない地域課題について、相互が協力して解決に向けて活動する。また、協働した方が多様なニーズに対するサービスの向上や行政運営コストの削減が期待できる。この地域住民としては自治会、NPO、企業、団体、住民など多様である。

現在、ボランティアやNPOの活動が非常時だけでなく、日常のこととして相互扶助や地域活動の一部を担っている。きわめて高度な知識や技術をもった人が、専門的な見地から地域協働に参加している。

特に、人口減少が進み、少子超高齢社会となった今日、地域内互助が求められており、公共の支出負担や地域居住者の幸福感も大きく変わる。これからの地域社会を考えていく際、地域住民間の信頼関係や互酬性の規範の共有といったソーシャル・キャピタルの高さが問われる。地域住民のソーシャル・キャピタルをどう醸成し、高めていくかが重要である。谷口（谷口，2015）は、「自分たちの地域に対して愛着と自信を持つことが、その実践の第一歩である。先人がたゆまぬ努力の中で、整備・改良を続けて築き上げてきた地域、それを引き継ぎ、発展させていくことは、われわれ世代に与えられた責務でもあり、その教えそのものを基本的な教育として、次世代に引き継ぐよう実践していく必要がある。」としている。まったく同感である。このためにも引き継いでくれる子ども、青年期の若者と多くの知識や経験を持った高齢者の参加、参画が重要である。

本研究が対象としているのは、従来、社会的サービスを受ける側である子ども・青年期の若者と高齢者の地域協働への参加、参画を中心とした議論である。

## 参考文献

西村出編（2018），広辞苑第七版，岩波書店，pp.1615.

谷口守（2015），入門都市計画，森北出版株式会社，pp.131-132.

張静（2018），子ども・青年期の若者・高齢者の地域協働への係わりに関する研究—子ども・青年期の若者の景観まちづくり参画と高齢者の社会参加を事例として—，広島文化学園大学大学院社会情報研究科博士論文.

## 1. 子ども・青年期の若者・高齢者が地域協働へ係われるか

### 1.1 地域協働に関する研究・事例

まちづくりにおける協働の主体は市民である。市民とは必ずしも地域住民に限定されず、町内会、自治会、自治協議会、NPO、学校、企業なども含まれる。また、行政も行政市民という名の市民である。協働は責任と行動において相互に対等な立場であることが不可欠であり、行政も地域の一員として、市民の目線で協働に携わる。多様な市民が相互に連携し、主体的にまちづくりに寄与していくことが地域協働の本質である。

地域協働は一つの課題が解決されたら、解散するのではなく、将来にわたって地域住民が安心して快適に暮らせるまちづくり活動を行うことが目的である。継続して活動されることが重要である。このことにより、地域協働の主体間の信頼関係が醸成される。

地域協働が継続して活動する要件として、片岡ら（片岡ほか，2010）は、活動初期において繰り返し、繰り返しの議論を経た構想に基づいて参加主体がそれぞれの取組をお互いに連動して進めることが重要であると指摘している。田中ら（田中ほか，2012）は、文化的景観保全に係る地域協働を事例として景観の本質的価値を共有していることが協働の要件であるとしている。また、大藤（大藤，2016）は、地域協働が継続して活動されるためには、担い手育成が重要であるとしている。

地域協働のキーワードを基にインターネット検索すれば、政府や多くの自治体が地域協働の取組についてホームページ上で公開している。たとえば、地域づくり<sup>1)</sup>、学校協働活動<sup>2)</sup>、健康まちづくり<sup>3)</sup>、また、就業支援や子育て、医療・介護、福祉といった各種事業についてはNPO法人が大きな役割を果たしている<sup>4)</sup>。

### 1.2 協働の概念

図1は協働に係わる市民と行政の関係を示す概念である。図中の市民と行政が重ね合わさった共通部分が行政も市民の一員であることを示している。地域協働が地域課題の解決につながり、かつ継続して活動できるかは、各主体が目標を共有する、対等の立場である、自主性を尊重する、信頼関係（ネットワーク）にある等が必要条件、原則とされている。

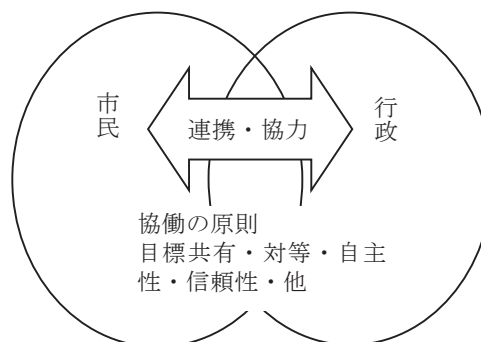


図1 地域協働の概念図－市民と行政

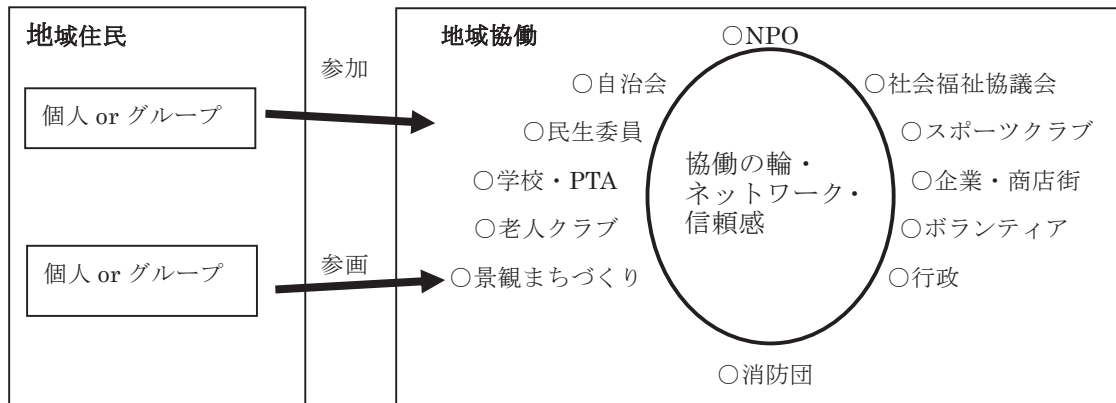


図2 市民主体間の協働，住民の参加・参画概念図

図2は，市民に注目して地域協働の概念を示したものである。そして，住民が地域協働にどのように係わるのかを図示している。カギとなるものは二つある。一つは，活動主体間の協働の輪・ネットワーク，信頼感が地域協働のキーワードである。二つ目は，地域住民に理解を得ることである。地域住民からの理解が得られれば，住民が地域協働に参加してみようという意思が芽生え，参加につながる。たとえば，災害時，多くのボランティアが復旧活動に参加している。彼らのうち，災害被害者であった人も多い。それは，被災者の立場を理解している部分も大きい。地域協働に対する地域住民の理解が重要である。

協働に参加することが，参画につながる。参画は，たとえば景観まちづくり活動のファシリテーターグループの一員として参加と定義できる。

課題によっては実際に活動する主体は限定される。当然，市民には行政も加わっている。また，NPOの存在は大変大きい。

### 1.3 子ども・青年期の若者のまちづくり参加・参画

子ども達は，1日のうち7，8時間を学校で過ごす。学校は，社会の縮図であり，さまざまな活動が行われる。

表1は文部科学省学生指導要領により作成したもので，学校内で毎日行われる時間割で示される授業以外の活動の主要なものを示している。特に，児童，生徒，学生等が協力し合いながら行う活動を中心に示す。同時に，放課後，土日休日の学校外での活動も示す。

小学校，中学校においては児童・生徒が教職員や地域の大人たちの指導や支援の下に共同の活動に参加する 경우가ほとんどである。この共同は協働の活動主体の下に加わることを意味している。

高校生は教職員や地域の大人たちと対等な立場で学校内や学校外での協働活動に参加する機会が多くなり，さらに参画する場合もある。

短大・大学等の青年期の若者たちは，教職員や学外の社会との協働が期待されている。特に，地方都市においては，若い人の意見と行動に対する期待が大きい。

表 1 学校内外での共同活動の一例（文部科学省学生指導要領参考）

	小中学校	高等学校	短大・大学等 青年期
学校内	児童会*・生徒会**・運動会・文化祭・クラブ活動 給食配膳・掃除 協力、共同を実践  *小学校の自治組織 教員の支援 **中学校の自治組織 生徒と教員の共同 自治組織には、各種委員会がある	生徒会*・運動会・文化祭・クラブ活動・清掃 組織の企画運営を実践 文化祭では学校外の市民との直接交流  *自治組織 生徒主体 自治組織には、各種委員会がある	自治会*・大学祭・スポーツ大会・クラブ活動・自主研究 組織の企画運営を実践 行事の企画立案，広報，実施 大学祭では学外に向けた情報発信，学外から講師や芸術家・アーティスト等を招聘  *自治組織 学生が独立して活動 自治組織には、各種委員会がある
学校外	集団登下校* 地域行事参加 祭り，清掃，美化活動に参加 ボランティア 保護者同伴が多い  *小学校で行われる 上級生が下級生指導	地域行事参加・参画 祭り，清掃，美化活動に参加 地域の伝統文化継承に参画（たとえば，広島県の神楽団） ボランティア	クラブ活動においては他大学との交流 地域行事参加・参画 地域おこし企画，実践 専門知識を活かした支援事業 ボランティア

欧米諸国においては、生徒会が生徒の代表として、学校的意思決定機関に対等の立場で参加しているとの報告（辻野，2015）がある。杉浦（杉浦，2011）は社会参加・協働の意識と能力を育てることを強調している。

また、本研究では、子どもと青年期の若者のまちづくり参加、さらに参画について考察することが一つの目的でもある。これらに関する研究も多くみられる。たとえば、柴田（柴田ほか，2007）は児童参加による小学校の広場デザインについて報告している。景観設計に関する学習，調査，討論等を経てデザインを提案，実施した過程が大きな教育効果であったと結論付けている。羽藤（羽藤ほか，2007）は中学生を対象に風景づくりの授業の中で中学生の風景に対する意識の変容について明らかにし，子どもの視線に立った風景づくりの可能性を示唆している。まちづくりに関する教育，自分のまち学習を通じてまちづくりの地域協働に参加，さらに参画できる知識と能力を身につけることができると結論づけられる。

## 1.4 高齢者の社会参加

### 1.4.1 高齢者の余暇活動

図 3 は，NHK が行った日本人生活時間 2015 年調査結果資料（関根ほか，2016）を基

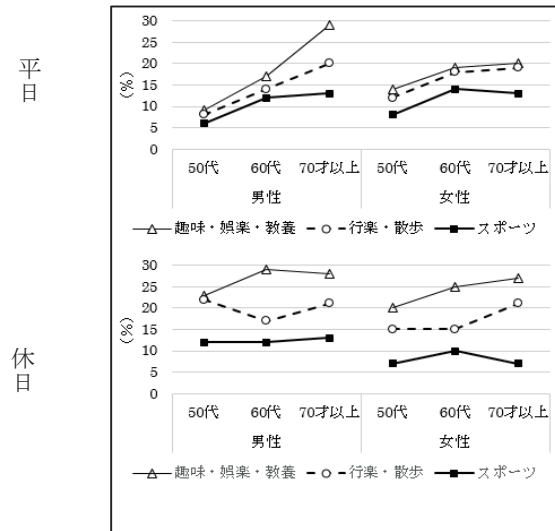


図3 2015年中高齢者の余暇活動行為者割合

に作成した中高齢者の年齢層別余暇活動の行為者率を示している。

趣味・娯楽・教養の行為者率は、平日の場合男女、年齢とともに高くなっている。特に、男性の場合顕著である。70才以上では約30%である。一方、女性は60代、70才以上の両年齢層ともおよそ20%の行為者率である。

休日の場合、60代の男性行為者率が高くなっている。60代は退職していない人が多いため休日活動が多くなる。女性は平日よりも休日の行為者率がおよそ10%高くなっている。70才以上の男性行為者率は平日と有意な差は認められない。

高齢者は、趣味・娯楽・教養の行動が顕著である。行楽・散歩は、遠方や近場にかかわらず外出を伴う行動である。

平日は趣味・娯楽・教養の行動と同様に年齢とともに行為者率が高くなっている。男性70才以上の行為者率が20%程度であり、趣味・娯楽・教養の行為者率30%に比べて低い。

休日では、50代の中年層男女ともに行為者率が高くなっている。60代、70才以上の行為者率は男女ともに高い。ただ、60代の女性のそれは平日よりも5%程度低い。

旅行代理店が売り出している高齢者向けのツアーパック商品の人気の高いことが納得できる。

スポーツについては、上述の二者とは異なる。男性の場合、60代と70才以上の行為者率は平日休日ともに10%強である。

女性の場合、平日は男性とほぼ同様に10%強である。しかし、休日になると、60代、70才以上ともに10%以下となり、行為者率は低くなっている。

スポーツの特徴は、50代の男性にある。平日の5%が、休日には10%強となっている。平日は仕事、休日は余暇活動としてスポーツに時間を使っている。

次に、図4中の3つの活動を合計した余暇活動について考察する。

働いている人、退職している人が混在している60代男性の内、平日43%、休日58%が余暇活動をしている。60代の女性のそれは、平日51%、休日50%である。

退職している人がほとんどである 70 才以上男性の場合平日、休日ともに 62%の行為者率である。70 才以上の女性のそれは平日 52%、休日 55%である。

高齢者は自由時間の中で余暇活動に多くの時間を使っている。このことは、健康で活動的な高齢者が多いことを示している。

#### 1.4.2 高齢者のインターネット利用

図 4 は、NHK が 2015 年に行った日本人の生活時間 2015 年調査結果資料（関根ほか、2016）を基に作成した中高齢者の年齢層別インターネットの行為者率を示している。なお、ここでのインターネットは、自由時間内の趣味や娯楽としての利用に限定している。男性

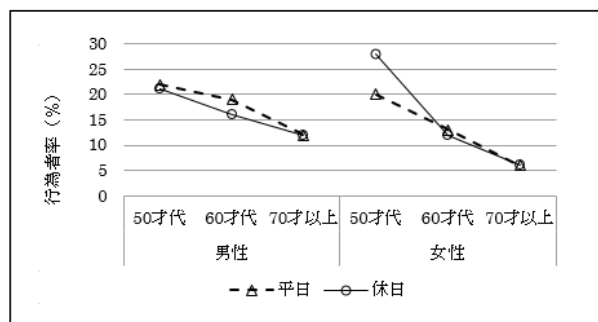


図 4 2015 年中高齢者のインターネット行為者割合

はいずれの年齢層も平日休日有意な差は認められず、年齢とともに行為者率は低下している。60代は約 16~18%の行為者率である。70 才以上のそれは、10%程度である。

女性においては、50代が休日と平日との間におよそ 10%の差があり、休日には約 30%の行為者がいる。60代、70 才以上の女性の行為者率は、男性 60代の約 16~18%、70 才以上の約 10%よりも低く、60代で約 10%、70 才以上で約 5%である。

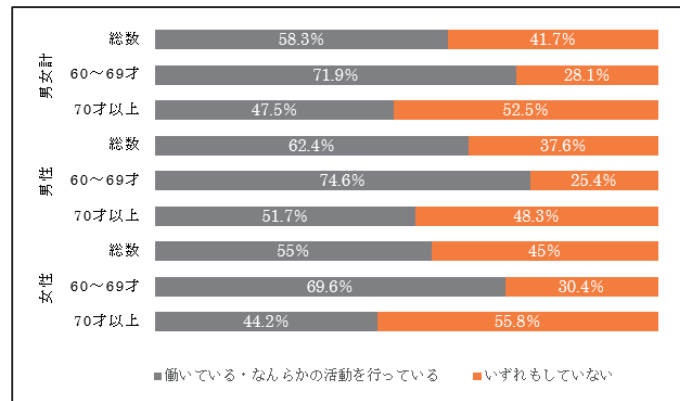
インターネット利用条件を付けない全体では、60代前半 83%、60代後半 70%、70代 53%、80 才以上 23%（総務省、2017）<sup>8)</sup> となっている。一方、13~59 才までは各階層で 90%を超えている。高齢者の利用率は高くなってきたとはいえ、他の年齢層に比較すると依然として低い。70代の利用しない人は半数近い。そして、利用の質にも問題がある。ICT 社会における高齢者の情報格差は存在している。緊急を要する災害情報が SNS で知らされる社会において情報格差は大きな社会問題であるといっても過言ではない。

#### 1.4.3 高齢者の社会活動

図 5 は 60 才以上の高齢者の社会活動の状況を示している。平成 30 年版高齢社会白書（内閣府、2018）資料より作成している。

図 5 によると、60代の 71.9%、70 才以上の 47.5%が働いているか、またはボランティア活動、地域社会活動（町内会、地域行事など）、趣味やおけいこ事を行っている。

男女別に 70 才以上での社会活動の状況をみると、男性は 51.7%、女性は 44.2%が働い



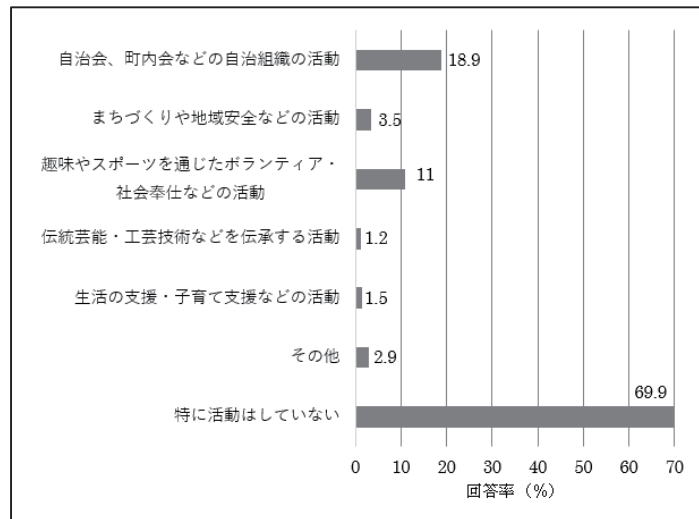
質問：「あなたは、現在働いていますか。または、ボランティア活動、地域社会活動（町内会、地域行事など）、趣味やおけいこ事を行っていますか。」

図 5 60 才以上の高齢者の社会活動実施状況

ているか、何らかの活動を行っている。逆に、「特に活動はしていない」と回答した者は、男女ともに 70 才以上が多く、男性 48.3%、女性 55.8%である。年齢とともに体力は衰え、「特に活動していない」の回答が多くなっている。

図 6 は、60 才以上の高齢者の社会貢献活動の参加状況を示している。図 6 と同様に平成 30 年版高齢社会白書（内閣府，2018）資料より作成している。

参加している活動は「自治会、町内会などの自治組織の活動」が 18.9%、「趣味やスポーツを通じたボランティア・社会奉仕などの活動」が 11.0%である。



質問：「あなたは現在、何らかの社会的な活動を行っていますか。あてはまるものすべてをお答えください。」

回答を求めた項目は、図 7 の「自治会、町内会などの自治組織の活動」・・・・「特に活動はしていない」の 7 項目である。

図 6 60 才以上の高齢者の社会的活動（貢献活動）の実施状況（複数回答）



しかし、「特に活動はしていない」と回答した者が最も多く、69.9%であった。高齢者の社会参加が求められるところである。

## 1.5 まとめ

文献調査、事例調査により地域協働（市民協働も含む）の理論的枠組み、市民参加・参画について分析、整理を行った。そして、子どもと青年期の若者の地域協働への参加、参画、および高齢者の社会参加について考察してきた。得られた主要な知見を以下に示す。

(1) 今、地域協働は地域のまちづくりに不可欠なものとなっている。将来にわたって安心して快適に暮らせる地域のまちづくり活動が継続することが重要である。継続して活動できるかは、協働の各主体間での目標共有、対等な立場、自主性尊重、信頼関係（ネットワーク）に係っている。また、担い手育成、現役の働き手も含めた地域住民の理解が重要である。

また、NPO が果たしている役割の大きさも分かった。彼らの専門知識・技術、行動力、交渉力に期待する部分が大変大きい。

地方の市町村を対象に分析してきた結果であるが、大都市も同様である。また、近い将来の中国においても議論される課題であると考ええる。

(2) 子どもは、小学児童、中学生、高校生へと成長するに伴い、学校内での授業以外の諸活動、たとえば生徒会、運動会、文化祭等の企画立案、運営・管理は教職員の指導や支援の下での協働、さらに自主的な企画立案、運営・管理へと変化してくる。学校外の地域行事においても同様である。地域の大人たちとの係わりが大きくなるのが特徴である。その中で協働に関する知識や能力を学習する。

一方、大人の一步前である短大・大学の青年期の若者たちは、学内においても社会においても協働が期待されている。特に、地方都市においては、若い人の意見と行動への期待が大きい。

結局は、子どもや青年期の若者たちの社会参加・協働の意識と能力を育てることが重要であると結論づけられる。

(3) 高齢者の趣味や娯楽としてのインターネット利用は、男性 60 代約 17%、70 才以上約 10%程度である。女性は、60 代約 10%、70 才以上約 5%である。

インターネット全般での利用になると、60 代前半 83%、後半 70%、70 代 53%、80 才以上 23%となっている（総務省、2017）<sup>6)</sup>。参考までに、13～59 才までは各年齢階層とも 90%を超えている。ICT 社会における高齢者の情報格差は存在している。

総務省は、高度情報通信ネットワーク社会形成基本法第二条<sup>6)</sup>で、「高度情報通信ネットワーク社会（ICT 社会）」とは、インターネットその他の高度情報通信ネットワークを通じて自由かつ安全に多様な情報又は知識を世界的規模で入手し、共有し、又は発信することにより、あらゆる分野における創造的かつ活力ある発展が可能となる社会をいう（すべての国民が情報通信技術の恵沢を享受できる社会の実現）と法律で定めている。すべての国民とは、高齢者も含まれている。高齢者のインターネット利用実態を見る限りでは、大変

低い状況である。

高齢者のコンピュータ・リテラシー向上は、ICT 社会における高齢者の社会参加にとって必須である。

(4) 社会活動については、「特に社会活動はしていない」と回答した高齢者は、男女ともに 70 才以上が多く、男性 48.3%，女性 55.8%である。社会貢献活動については、「特に活動はしていない」は 69.9%であった。一方で、趣味・娯楽・教養，行楽・散策，スポーツなど、個人で、任意の時間に活動できる余暇活動を行っている。高齢者の社会的活動はなされているが、社会貢献活動に期待されるところがある。

高い専門知識・技術，経験を有した高齢者は多い。高齢者の社会参加，貢献活動に期待するところが多い。

(5) 上記 (2) で述べたように子どもや青年期の若者たちの社会参加・協働の意識と能力を育てることが重要であると結論づけた。また，(3) では ICT 社会における高齢者の情報格差は，利用実態でみる限り，歴然としており，高齢者の社会参加にとってコンピュータ・リテラシーは重要であり，コンピュータを使えることが高齢者の社会参加，地域協働への参加につながる。さらに (4) では高齢者自らの社会貢献活動が地域の高齢者の自立と共助を高めることになり，さらには，地域住民にも地域協働，市民協働の理解を深めてもらうことになる。これが地域協働を継続していくことにつながることになる。

地域協働の継続性を考えるならば，子どもや青年期の若者の社会参画，地域協働参加・参画について考察することは意義のあることと考える。

また，これまで地域協働や市民協働においては，支援を受ける側であったが，高齢者自らが社会貢献活動，社会参加を進めることが今まで以上に求められているところである。

## 参考資料

- 1) 横浜市，参加と協働による地域自治の支援，  
<<http://www.city.yokohama.lg.jp/shimin/shikatsu/suisshiniinnkai/kaigiroku/dai1kidai6kaisiryoku7.pdf>>
- 2) 文部科学省 (2018)，地域学校協働活動，地域と学校でつくる学びの未来，pp.1-3.  
<<http://manabi-mirai.mext.go.jp/assets/files/H29kikaku/180118tiikigakkoukyoudoukatsudoupanhuretto.pdf>>
- 3) 札幌市健康づくり推進協議会 (2014)，平成 26 年 12 月 16 日第 2 回健康づくり推進協議会 資料 2，p.1-7.  
<<https://www.city.sapporo.jp/eisei/kenkozukuri/kyogikai/documents/shiryoku2-2.pdf>>
- 4) 厚生労働省，NPO との協働ホームページ  
<<https://www.mhlw.go.jp/topics/npof/>>
- 5) 総務省 (2017)，インターネットの普及状況，平成 28 年版情報通信白書，  
<<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/html/nc252110>>

html>

- 6) 総務省, 平成十二年法律第百四十四号高度情報通信ネットワーク社会形成基本法第二条, <[http://www.soumu.go.jp/menu\\_hourei/itshakai.html](http://www.soumu.go.jp/menu_hourei/itshakai.html)>

## 参考文献

大藤文夫 (2016), 「ふれあい広場」の誕生—呉市三条地区の事例—, ネットワーク社会研究センター研究年報, Vol.12, No.1, pp.49-60.

片岡由香・出村嘉史・山口敬太・川崎雅史 (2010), 官民共同の地域づくりにおける市民の自律的役割と活動の継続性に関する研究—近江八幡市を事例として—, 景観・デザイン研究講演集, No.6, pp.212-218.

柴田久・石橋知也・松尾健史 (2007), 福教大附属福岡小学校における自動参加の広場デザイン, 景観・デザイン研究論文集, No.3, pp.7-16.

杉浦正和 (2011), 社会参加・協働の意識と能力を育てるカリキュラム・生徒活動の研究—日本の生徒会と政治活動・生徒参加—, 学校法人芝浦工業大学『高校・中学教育研究報告書<2010年度版>』, pp.7-18.

<<http://www.ka.shibaura-it.ac.jp/shakaika/10REPORT%20social.pdf>>

関根智江・渡辺洋子・林田将来 (2016), 日本人の生活時間・2015, 放送研究と調査, Vol.66, No.5, pp.2-27.

田中尚人・岩田圭佑・野原浩大朗 (2012), 文化的景観保全に係る地域社会の協働に関する研究, 景観・デザイン研究講演集, No.8, pp.167-174.

辻野けんま (2015), ドイツ合議的学校経営における「教育参加—専門監督—教職専門性」に関する事例研究, 平成 25 年度~26 年度上越教育大学研究プロジェクト 研究成果報告書, p.3.

<[https://www.juen.ac.jp/050about/050approach/030relation/project/01\\_tsujino.pdf](https://www.juen.ac.jp/050about/050approach/030relation/project/01_tsujino.pdf)>

内閣府 (2018), 平成 30 年版高齢社会白書, pp.39-43.

羽藤英二・濱上洋平・上田真弓 (2007), 風景づくり授業の導入による子どもの風景に対する意識構造の変容に関する分析, 景観・デザイン研究講演集, No.3, pp.338-341.

## 2. 研究の枠組み

本論文では, 地域協働の主要な活動の一つである景観まちづくり活動への子ども, 青年期の若者の参画, 超高齢社会における高齢者自らの自助, 他者を思いやる共助の社会参加についてその現状と課題, そして課題の解決について考察することを目的としている。このことを達成するために三つのことについて研究を進める。

## 2.1 子どもの都市景観認知

一つ目は、将来のまちづくりを担う子どもたちの景観まちづくりへの参画の必要性とその可能性について議論している。子どもが地域協働に係わることに限らず行政のみならず多くの人や団体が疑問視している現状がある。はたして子どもにできることは何があるのだろうか、その能力、力があるのかなどさまざま疑問を持っている。しかし、地域協働に子どもの参加を求めているケースも見受けられる。

本研究は、子どもが地域協働の一つである景観まちづくり活動に係わること、また子どもの視点で係わっていくことが子どもの地域協働に関する知識や能力を高めることにつながると考える。子どもは少子超高齢社会の中で地域の歴史、文化、生活習慣等の継承者であり、また将来の社会の担い手でもあるから、子どもの視点を景観まちづくりに反映できれば、自分のまちに対する関心と誇りを持ち、継続性のある地域協働に繋がる。そこで、子どもの景観認知特性を明らかにし、景観まちづくりに求められる知識や能力について実証研究を通して考察する。そして、その知識や能力に応じた景観まちづくり活動の参画について考察する。

## 2.2 青年期の若者の都市景観認知とイメージ

二つ目は、青年期の若者たちの景観まちづくりへの認識、関心について考察する。景観は、その土地の歴史、文化、生活習慣、風習などが具現されたものである。しかしながら、住民にとって景観は関心事ではなく、自分たちの日常生活の経済的側面に関心が向きがちである。このことが風景の荒廃を招く可能性の高いことを玉井ら（玉井ほか、2014）は指摘している。

本研究は、子ども期を過ぎたが、社会経験の少ない青年期の若者の景観認知特性を定量的に明らかにする。彼らこそが地域の歴史、文化、生活習慣、風習を受け継ぐ直接的な年代であり、地域協働への参画が期待されている。特に、進学や就職のため、故郷を離れて暮らすことになった若者たち、すなわち他者から観たその土地の景観特性を発見することにもつながり、地域協働活動に一情報を提供できると考える。

## 2.3 高齢者の社会参加

三つ目は、地域からサービスを受ける立場というように捉えられている高齢者の社会参加について考察する。

政府、地方自治体の財政事情は依然として厳しい状況が続いている。政府は、国と地方の基礎的財政収支を巡り、黒字化が2027年度にずれ込むとの試算をまとめた（日本経済新聞、2018）。団塊の世代が75歳の後期高齢者に突入する2023年は、依然として財政赤字の状況ということになる。社会福祉、医療への財政支出は困難である。こういった中、高齢者自身が自立し、高齢者が高齢者を支援する共助が求められる。

今後一層進展していくICT社会における高齢者の自助にとって必須であるコンピュータ・リテラシー学習支援について考察する。また、共助として高齢者の地域協働活動と社

会参加の現状と課題について考察する。高齢者個人が社会貢献活動に参加することには躊躇するが、複数であればその敷居は低くなる。本研究では地域の老人クラブの活動の現状と課題について調査分析をする。

## 参考文献

玉井瑛子, 山田圭二郎, 川崎雅史 (2014), 「なつかしさ」体験の諸特性に関する研究, 景観・デザイン研究講演集, No.10, pp.267-271.

日本経済新聞 (2018), 財政黒字化 27 年度に内閣府 2 年先送り増税使途見直し／生産性伸び低く, 日経新聞朝刊, 2018/1/11 付.

## 3. 子ども・青年期の若者の景観認知特性と地域協働

### 3.1 子どもの都市景観認知\*

\*張静・今田寛典 (2017), 子どもが「私の好きな風景」について書いた自由記述からみた都市景観に関する一考察, 広島文化学園大学社会情報学部紀要社会情報学研究, Vol.22, pp.45-52.

#### 3.1.1 研究の概要

都市景観を構成する要素は多方面に渡り, 視覚に訴えられる対象ばかりではなく, 視対象が存在する意味まで広範囲であるべきと考える。子どもは存在する意味を考えているのであろうか。

子どもの都市における景観認知を把握するため, 子どもが日常および非日常生活の中で景観をどのように考えているのか, その思いを書いた自由記述データを定量的に分析する。自由記述データの分析に当たってはテキストマイニングを適用する。

なお, 研究では, 子どもの成長過程において都市景観に対する意識の変容も知るため, 小学生から中学生までを対象とした。

子どもにとって都市景観について自由に記述することは労を要するので, 「私の好きな呉市の風景」絵画コンクールを行い, 絵画の題材選択, 描く過程等を通してのコメントを求めた。

絵画コンクールは, 美しいと思った風景, 呉らしさを感じる風景, 未来に残したい風景, 呉を代表する風景を絵に描いて応募するものであり, 応募対象者は呉市内に住む小学児童と中学生徒とした。絵画提出時, 好きな呉市の風景を描いた理由を 50 文字程度の短文として提出することを求めた。

絵画コンクールの趣旨を理解して風景を描くことは, まず, 視点と視対象を選ぶための思考がある。次に, 思考した結果を絵に描く。これらの過程を経た結果が短文として記述されているので, 積極的な意見であると判断できる。

小学児童 87, 中学生徒 625 の記述データを用いる。研究ではこの自由記述に注目して、子どもたちの都市における景観認知を探ろうとするものである。

テキストマイニングを適用し、文章内容よりも文章を構成する単語に焦点を絞った。子どもが景観に対する意識をどのような言葉で表現しているのかを明らかにするため、形態素解析により記述データを名詞、動詞、形容詞に分解した。より抽出された単語（名詞、動詞、形容詞）群から景観認知構造を考察するため多次元データ解析（クラスター分析および対応分析）を適用した。

このテキストマイニングアプローチは、以降の 3.2, 3.3 においても主要な分析手法としている。

### 3.1.2 考察

子どもの都市景観認知の特徴を検討し、さらに、参画について検討を行った。以下に得られた知見を示す。

(1) 子どもは、都市景観構成要素として広く知られている事物、と同時に自宅近くの日常生活の中での祭り、花火、夜市等をも都市景観として認知している。都市景観構成要素は建造物、景勝地といった視覚に訴えるものが議論されている場合が多い。しかし、良好な景観形成には視覚も大変重要であるが、地域の風土、文化、伝統、風景の保全が求められるものである。この点に関しては、子どもの視点は重要な示唆をしていると考える。

(2) 建造物が本来持っている機能も都市景観構成要素として認知している。たとえば、橋梁、鉄道・駅舎、道路等の人と人を繋ぐという視点は、学校や日常生活の中での学習が大きな影響をしている。特に、記述文にも多数登場する両親、祖父母の影響は大きい。

(3) その土地に生れ育ち、生活を営んできた祖父母を含め高齢者が地域の風土、文化、伝統、風景を次世代に継承されていることが明らかとなった。

(4) 子どもの成長に伴い景観に対する視点も子どもから青年期の若者、そして大人へと変化していく。身近な景観まちづくりに対する子どもの視点は重視すべきと考える。たとえば、学校周辺の街路の花壇整備や世話、さらに浜辺の清掃活動など多くみることができる。

(5) 以上の考察を通して、子どもは景観を眺めだけではなく、景観の意味をしっかりと把握していることが分かった。景観まちづくり活動においては景観の意味が重要な議論対象となる。子どもは大人にはみえない景観を指摘できる。子どもが景観まちづくりに参画して子どもの視線を反映することは、将来にわたって景観を守ろうという継続性が生まれることにもなる。

## 3.2 子どもの樹木景観認知\*

\*張静・今田寛典 (2016), 子どもの樹木景観認知構造に関する一考察 - テキストマイニングによる試み -, 環境情報論文集, No.30, pp.249-254.

### 3.2.1 研究の概要

景観法は、都市、農山漁村等における良好な景観の保全・形成を促進するとしている。景観計画区域内において特に良好な景観を構成している樹木を適正に保全していくため、景観重要樹木として指定することができるともしている。景観重要樹木指定にあたっては、地域住民の意見を尊重することが、住民提案制度として示されている。住民がより主体的に計画策定段階から参加することが求められ、多くの都市が市民協働の景観まちづくりの推進に力を入れている。しかし、子どもの参加については言及されておらず、景観まちづくり学習の重要性が言及されているにすぎない。

候補樹木の選定に将来のまちづくりを担う子どもの視点を反映することも重要であると考え。このため、子どもの樹木景観に対する意識を明らかにし、子ども視線による都市における樹木の位置づけを考察する。そうすることによって都市の身近な緑化・環境計画に子どもの視線を反映できる。

そこで、小学児童と中学生を対象とした絵画コンクールを実施した。美しいと思った樹木のある風景、気になる木のある風景、未来に残したい並木など、好きな呉市の樹木のある風景を絵に描いて応募するものである。樹木のある風景を描いた理由を100字程度のメッセージとして提出することを求めた。本研究ではこのメッセージに注目して、テキストマイニングにより定量的に分析し子どもたちの樹木に対する景観認知を探ろうとするものである。

子どもが樹木景観に対する意識をどのような言葉で表現しているのかを明らかにするため、形態素解析により記述データを単語（名詞、動詞、形容詞）に分解した。抽出された単語群を用いて多次元データ解析を行った。

### 3.2.2 考察

呉市内に住む小学児童と中学生を対象に自分が住む町の樹木のあるすばらしい風景を題材とした感がコンクールを行った。その際絵画の題材となった樹木を選んだ自由記述データ分析から分かった子どもたちの樹木景観認知について考察した。研究で得られた主要な知見を以下に示す。

(1) 子どもは、樹木景観について多様な視点場および視対象を指摘している。大人が指摘する樹木形や歴史等についての意見は少数であり、身近にある樹木に対する景観保全を指摘している。

(2) 小学低学年の子どもは日常的な行動範囲の中での樹木に対する景観認知であり、高学年になると非日常的な行動範囲の中での樹木景観も認知している。中学生になると風景の中での樹木景観認知となっている。

(3) また、子どもの樹木景観認知は小学校から中学校への成長とともに変容していく。日常的空間から非日常空間の中での樹木景観認知へ、さらに活動的空間から心理的空間での樹木景観認知へと変容している。

子どもの樹木景観認知と認知構造は、子どもの空間認知能力の発達によってその領域が

点、線、面へと変化、分節される（寺本ほか，2004，若林，1999）という発達心理学や認知心理学とも合致する。

以上のことを考慮するならば，子どもが地域協働による景観まちづくりに参加することも現実的である。また，上記（2）でも考察したように小学低学年は日常空間での樹木景観認知であり，地区内での重要景観樹木選定に，高学年，中学生となれば非日常空間での樹木景観認知となり，都市域での重要景観樹木選定に参加できる。小中学校との連携，小中学生を対象としたワークショップ等を通して行政資料にも登録されていない新たな樹木発見も期待でき，景観まちづくりに子どもの視点を反映することはまちづくりの側面からも社会的意義は大きい。さらに，このことは子どもの景観学習にもつながり，なによりも地域協働に対する学習効果も大きいと考える。

### 参考文献

寺本潔・大西宏治（2004），子どもの初航海，古今書院。  
若林芳樹（1999），認知地図の空間分析，地人書房。

## 3.3 青年期の若者が抱く都市景観イメージ特性\*

\*張静・今田寛典（2018），テキストマイニングによる青年期の若者が抱く都市景観イメージに関する分析的研究—中国大連市の大学生を事例に—，社会情報研究，Vol.23，No.1，pp.1-13.

### 3.3.1 研究の概要

青年期の若者の多くは，就職や進学のため，故郷を離れて新たなまちで生活をするようになる。彼らは，どこが住居で，どこが職場であり，学校であるのか，またどのルートを通って職場に，学校に行くのか，どこにコンビニがあり，銀行があるのか，生活の場を頭の中に記憶し，その記憶をたどりながら日々の活動をしていく。また，新たな発見を求めて出かけるかもしれない。

ケヴィン・リンチ（Lynch, 1960，丹下ほか，2007）は，都市は人々によってイメージされるものであり，イメージアビリティ（イメージされる可能性）を高めることが，楽しく，美しい環境にとって要件であるとしている。

しかしながら，故郷が異なる若者達にとって都市景観，都市美は関心事ではなく，現状を受け入れるままである。そのまちで生まれ育った若者にとっては，目の前の都市景観はあたり前の景観であり，風景となっている。このことが風景の荒廃を招く可能性の高いことが指摘されている（玉井ほか，2014）。

都市景観は人々が抱く都市の理想像，歴史的な蓄積，都市活動などが体现されているため，その評価には単に眺めの美しさだけでとらえることは困難な場合が多い。

本研究は，青年期の若者が就職や進学のため新たに生活を始めた都市のイメージおよび



景観評価について視覚的、身体感覺的、意味的の側面から考察する。このため、彼らが、日常生活を通して得た都市空間や生活上の情報を記述した文章にテキストマイニングを適用する。学生に求めた記述内容は以下の2つである。

(1)大連市のイメージを表現する言葉（キーワード）を5つ書いてください。

(2)あなたが大連で暮らして、美しいと思った風景を書いてください、その理由も教えてください。

被験者は、中国大連職業技術学院の学生1, 2, 3年生を対象としている。転居間もない学生、年月が経った学生、もともとその都市で育った学生たちである。1年未満が過半数であり、次に5年以上、5年未満の順であった。

### 3.3.2 考察

故郷を離れて暮らす若者が抱く都市イメージと美しい風景について記述したテキストデータにテキストマイニングを適用して青年たちの都市景観イメージと景観認知構造の特質を明らかにする試みを行った。これは、外部から移住してきた青年期の若者が観る景観認知は、そのまちで生まれ育った若者よりも新鮮な観方をしており、新鮮な指摘することを期待しての調査分析であった。

以下に得られた知見をまとめる。

(1) 故郷を離れて暮らす若者が抱く都市イメージは、暮らし始めて間もない時期には故郷のイメージと比較しながら形成されていき、新鮮な思いがイメージに表れている。特に、都市の経済の部分がイメージに鮮明に表れている。都市の働く側面である。彼らが都市に移住してきた目的もその部分にあり、そのための進学でもあったわけであるから。しかし、年数の経過とともに彼らの行動範囲も拡大し、多くの体験を積み重ね、その都市のイメージも変化している。彼らがオシャレ、ロマンチックのような言葉で表現するように都市の憩う側面がイメージされるようになる。また、その都市で生まれ育った若者たちには憩う側面が強くイメージされている。

(2) 一方、住む側面に関しては都市の環境について認識されている。このことは居住歴には関係ない。若者達の環境まちづくりが具現されることが望まれ、若者たちのまちづくり活動への期待は大きく、彼らの奮起を期待する。しかし、住む側面の中、特に都市景観はその都市の歴史、文化、生活習慣が体現されたものであるが、これに関するイメージは見受けられない。これは、後述する都市の美しい風景の景観認知についても同様である。

(3) 美しい風景の具体的な視対象は居住歴とは関係ない。若者たちは市民を含め広く人々に知られた観光地、景勝地を美しい風景であると指摘している。これらの視対象は若者たちの都市イメージに合致している。しかし、景観評価構造からは、他地域から移り住んで来た若者たちとその都市で生まれ育ってきた若者たちの間には非日常性と日常性とに違いが認められる。観光で、ビジネスでやってくる外来者にとっては非日常性が評価されている。娯楽街、景勝地等の夜景も都市の一つの景観であり、若者たちもそのことを認知している。

(4) 住む側面に関しては、環境については都市景観として認知されていることを示したが、都市の歴史、文化、生活習慣については都市景観として認知されていない。このことは、玉井らも指摘しているように都市景観の荒廃を招く可能性が高い。日本では子どもの景観まちづくり学習が熱心に行われており、将来のまちづくり担う子ども達の役割も期待されている。しかし、青年たちへの期待は小さいのが現実である。中国では近代化が急速に推し進められ、近代都市における文化、生活が一律となり、都市のアイデンティティが失われつつある。小中高等学校での自分たちのまちに関する学習と同時に、高等教育機関でのまち学習が必要である。これが、若者たちが地域協働に参加するモチベーションになる。

(5) 都市の歴史、文化、生活習慣等都市の住む側面からの都市景観については、教育の重要性を指摘したのみであり、具体的なまちづくりについては言及していない。このことは今後の課題である。

### 参考文献

- 玉井瑛子・山田圭二郎・川崎雅史 (2014), 「なつかしさ」体験の諸特質に関する研究, 景観・デザイン研究講演集, No.10, pp.267-271.
- 丹下健三・富田玲子 (2007), 都市のイメージ, 岩波書店
- Lynch, Kevin (1960), *The Image of the City*. Cambridge MA: MIT Press. OL 5795447M.

### 3.4 子ども・青年期の若者の地域協働への参加・参画について

景観まちづくり活動を事例として子どもや青年期の若者が地域協働に参画して彼らの視線で議論できる景観に対する知識や認知能力について研究してきた。以下に地域協働参画に注目して考察する。

(1) 子どもは景観を眺めだけではなく、景観の意味をしっかりと把握している。景観まちづくり活動においては景観の意味が重要な議論対象となる。子どもは大人にはみえない景観を指摘できる。小学校児童の景観認知は普段の活動区域である身近な景観に関心があり、身近な景観まちづくりに参加することにより自分が住んでいるまちをより深く知ることになる。中学生になると、景観認知は都市域へと広がり、自分の都市のアイデンティティを景観として把握している。さらに都市域の自然景観にも関心が広まっていく。中学生は景観まちづくり活動に参画することができる。彼らの視線を景観まちづくりに反映することは、将来にわたって景観を守ろうという継続性が生まれることにもなる。

(2) 景観法は、景観計画区域内において特に良好な景観を構成している樹木を適正に保全していくことを求めている。さらに、景観重要樹木の指定の方針には市民に広く愛され、親しまれている樹木としている。こういった意味においても、樹木を大切にすることを育てることも景観まちづくりにおいても重要である。小学低学年は日常的空間での樹木景観認知であり、地区内での重要景観樹木選定に、高学年、中学生となれば、非日常的空間での樹木景観認知となり、都市域での重要景観樹木選定に参加できる。小中学校との連携、小

中学生を対象としたワークショップ等を通して行政資料にも登録されていない新たな樹木発見も期待でき、景観まちづくりに子どもの視点を反映することはまちづくりの側面からも社会的意義は大きい。さらに、このことは子どもの景観学習にもつながり、地域協働に対する学習効果も大きいと考える。

(3) 高校生や大学生になると、学内、学外でのクラブ活動が盛んになる。このクラブ活動で青年期の若者は社会活動の実際を学習し、実践することになる。この意味においても、地域において彼らが活動する場面は多くある。景観まちづくり活動の視点から考察すると、若者たちは都市の環境を景観として認知しており、彼らの環境まちづくり活動が望まれ、彼らによるまちづくり活動への期待は大きい。しかし、その都市の歴史、文化、生活習慣等については景観認知されていない。景観認知の対象は景勝地、観光地等であり、都市景観の衰退が懸念される。本研究では、青年期の若者が地域協働に積極的に係ることができると期待していたが、必ずしもそうではなかった。

高等教育機関でのまち学習が必要である。これが、若者たちが地域協働に参加するモチベーションになる。景観を学んだ学生が小学校や中学校での景観授業に強い関心を示し、実践しているとの研究もある。

以上のことを考慮すれば、子どもや青年期の若者が景観まちづくり活動に参画し、彼らの視線で議論することができる。青年期の若者に関しては、まずはその地域に関心を持ってもらうことが重要である

#### 4. 高齢者の社会参加

高齢者の社会的活動への参加が、自立した生活スタイルを維持でき、QOL (Quality of Life) 向上にもつながる。また、社会的活動を通して精神的活力、人的サポートに満足感を示すという報告 (永田ほか, 2010) もある。

高齢者支援に関する地域協働と ICT 支援と、一見異なる研究分野と思えるが、いずれも情報化が進展する社会において、高齢者が地域協働で果たす役割の大きさを考えれば、高齢者自身の ICT 能力を高めることが求められる。特に、仕事でコンピュータを利用する機会の少なかった高齢者、使用したことのない高齢者の ICT 能力を高めてもらうことが QOL 向上にもつながる。

また、高齢者が個人で地域協働に参加することは躊躇されるが、グループであれば、比較的円滑に参加できる。

そこで、高齢者個人の QOL 向上につながるパソコン指導の地域協働について考察する。また、高齢者個人ではなく、老人クラブ連合会の社会貢献について現状と課題を考察する。

#### 参考文献

永田久雄・鈴木貴子・高田和子・西下彰俊 (2010), 高齢者の社会的活動と関連要因—シル

バー人材センターおよび老人クラブの登録者を対象として、日本公衛誌, Vol.57, No.4, pp.279-289.

#### 4.1 高齢者のコンピュータ・リテラシー\*

\* Jing Zhang and Shigeki Yokoi (2010), Development and evaluation of the Internet software e-namokun2.0 for senior citizens, 2010 International Conference on e-Commerce, e-Administration, e-Society, e-Education, and Technology, e-CASE & e-Tech 2010 Macau, January 25-27, pp.1-13, 2010. <<http://e-case.org/2010/>> 参照

##### 4.1.1 研究の概要

昨今ではスマートフォン、SNS (Social Networking Service) が当たり前の社会となっている。

ICT 社会において災害情報、交通情報、医療・福祉情報などがインターネットで伝達されている。こういった中、高齢者のインターネット利用率は、他の年齢層よりも低い<sup>1)</sup>。また、インターネットを利用できたとしても、常に新しい知識、技術を学習しなければならない。

こういった中、インターネットの知識を学びたいという学習意識の高い高齢者は多くになっている。しかし、彼らのコンピュータを使うことをマスターできない割合は、実際にコンピュータの講習と実技指導を受けた後でも非常に大きい。

高齢者が使いやすいソフト、システムの開発や操作支援が求められる。2004年名古屋大学と名古屋市が中心となって、NPOとも協働し、e-なもくんプロジェクト5年計画を立ち上げ、高齢者のコンピュータ活用を推進してきた。マウスの操作だけでインターネットや電子メールが使える特別なソフトウェアが開発された。2009年名古屋大学はe-なもくん2.0を開発し、その有用性について検証している。

まず、高齢者を対象としたe-なもくん2.0利用講習会を開催した。講習会は大学、NPO、名古屋市生涯学習センターの三者の地域協働である。

大学は教材作成、技術支援 (Yokoi et al, 2009) を、NPO はパソコンの提供と講習会講師を、センターは講習会広報と会場準備を担当している。

講習会後にe-なもくん2.0についてアンケート調査を行う。そして、結果を分析し、e-なもくん2.0ソフトの有用性を検証する。アンケート調査票の作成と分析は大学が主に担当している。なお、NPOはITボランティアであり、退職高齢者で組織されている。

##### 4.1.2 考察

急速に進歩しているICT社会において高齢者が社会に孤立するのではなく、社会参加、さらに社会貢献活動に参加するため、コンピュータ・リテラシーも重要な役割を果たす。本

研究は、高齢者自身の自助、また他者とのつながり、共助を支援できるインターネットソフト e-なもくん 2.0 の提案とその有用性を検証した。以下に得られた知見を示す。

(1) 高齢者向けインターネットソフトである e-なもくん 2.0 の活用促進を目指し、高齢者を対象とした講習会を実施し、その講習会の後に実施したアンケート調査結果から、e-なもくん 2.0 は高齢者のパソコン初心者に対して、適切で有用なソフトであることを示した。

(2) e-なもくん 2.0 は、マウス操作だけで、文字入力とインターネット閲覧ができることは、弱視者などの障害者にも利用拡大できると判断され、利用者の範囲が広げられることも期待される。

(3) 300 人以上の講習会参加者となったことは、本プロジェクトには高齢者で組織された IT ボランティアの NPO が参画し、パソコン操作指導している。このことは高齢パソコン初心者にとっても参加しやすい環境を整えることになったこと、生涯学習センターの高齢者の情報活用促進があったこと等地域協働に基づいた活動であったことが大きな研究成果でもある。

(4) さらに、参加者のアンケート調査結果より参加者の多くが達成感を示していることは同年代の IT ボランティアの指導によるところが大きい。今後は、講習会に参加した高齢者がパソコン指導をする側になることが望まれる。そのための、講習の方法も検討課題である。

(5) 高齢社会が進む昨今では、今後ますますデジタルデバイドの問題が大きくなると考えられる。新 e-なもくんソフトが現在よりももっと広く、多くの人に使用されるようになり、デジタルデバイド解消につながることを望む。

(6) 高齢者のインターネット利用率は向上してきているが、60 代の SNS の利用率は 22.6% であり、50 代の 45.4% に比べると低い (総務省, 2017)。これからの高齢者は ICT を活用し、自身の活動領域を広げていくことが想定される。SNS の活用等により、高齢者が蓄積した知識・技術・経験をまちづくり等の社会参加に活かしていくことが重要である。本研究で提案した e-なもくん 2.0 はインターネットとメールに特化した支援システムであるが、SNS 活用支援システムに適用できる。それは、人的支援システムも含めて考えなければならない。特別な専門的な知識ではなく、インターネットや SNS についての知識や技量を有した高齢者自身が他者を支援することができる。さらに、高齢者によるコンピュータ・リテラシー支援の社会貢献が期待される。

## 参考資料

- 1) 総務省, 2017 年「情報通信白書」インターネットの普及状況  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/html/nc252110.html>

## 参考文献

Shigeki Yokoi and Wei Zhou (2009) , Supporting Senior Citizens to learn IT skills, January.

### 4.2 老人クラブの地域社会との連携・協働\*

\*張静・今田寛典 (2017), 老人クラブの地域社会との連携・協働に関する一考察, 広島文化学園大学ネットワーク社会研究センター研究年報, Vol.13, No.1, pp.1-18, 2017.

#### 4.2.1 研究の概要

協働によるまちづくりは、多様な担い手の掘り起こしや地域の良さの自覚にもつながる。多様な担い手は、住民であり、行政であり、企業であり、NPO であり、多様である。住民には子どもから高齢者まですべてが係ると考える。

社会的な共同生活の機能を維持することが限界に近づきつつあることも事実であり、高齢者の社会参加・貢献が求められるところである。高齢者個人が社会に貢献することに関しては躊躇する場合がある。しかし、複数の個人が協働で実行することには抵抗感は小さいであろう。

そこで、研究では地域のまちづくりの一端を担っている老人クラブの活動に焦点をしばり、高齢者の社会参加・貢献について調査、分析することとした。

調査は、呉市と庄原市の 2 市老連を取り上げ、その末端である 326 単位老人クラブを基本単位としている。呉市は中核都市であり、都市部を有している。庄原市は中山間地の小都市であり、広大な過疎地域を有している。2 市は地方の中小都市の典型であると考えられ、研究対象として妥当であると判断した。

最初に、広島県、呉市、庄原市の老連事務局を訪問し、ヒヤリング調査を行い、整理している。

次に、呉市と庄原市の単位老人クラブを対象に、平成 28 年度老人クラブ事業費補助金等完了報告書に記載されている事業実績の内容を調査、分析した。分析法としては各単位老人クラブが行った授業内容を変数とした多元データ解析、具体的には対応分析を行い、単位老人クラブの類型化を図った。

最後に、中国四国地区の持ち回りで中国四国ブロック老人クラブリーダー研修会が開催されており、その研修会で報告された事業内容について調査した。平成 29, 28, 27, 26, 25, 24 年度の研修会レジュメ<sup>2)</sup>に示されている事業内容を分析対象としている。分析手法としては、KJ 法を用いて老人クラブが目指す活動方針を明らかにした。これまで、文章で示されていた方針をいくつかの方向性に整理することができた。

#### 4.2.2 考察

本研究は、超高齢社会において、高齢者が地域社会との連携や社会貢献している実態を調査、考察してきた。特に、地域の各地区で活動している老人クラブを研究対象とした。

得られた知見を以下に示す。

(1) 地域に密着した老人クラブは、実に多様な活動を実践している。この活動を継続していくうえで、地域協働や社会貢献ばかりではなく、懇親会、旅行、同好会といった楽しい活動も積極的になされている。これが、会員の入会に繋がり、地域協働に繋がっていくと考える。

(2) 老人クラブの活動は、動的な活動と静的な活動、生活文化に関して能動的活動と受動的な活動、さらに学習に係る活動、慰労・慰安に係る活動に大別できる。高齢化率の低い老人クラブでは動的・能動的活動が特徴的であるが、高齢化率が高く、地域の中心部から離れた老人クラブは受動的活動に特徴がある。

(3) 老人クラブの情報化は急務であると認識されている。仕事でコンピュータが当たり前といった世代が、前期高齢者、後期高齢者へと年を重ね、単位老人クラブも含めて老人クラブの運営を担うことになれば、情報化は急激に進展し、老人クラブの地域協働は格段に進むことになる。

さらに、老人クラブは一層地域に密着した地域協働、社会貢献を目指しており、中国・四国ブロックリーダー研修がもたれている。研修では特徴ある活動実践が報告されると同時に少数ではあるが、課題についても報告されている。本研究では、課題に注目し、分析もしている。以下に得られた結果をまとめる。

(4) 老人クラブが公助に依存することなく共助を進め、さらにまちづくりの主役になろうという新たな活動を進めている。その中で、魅力ある老人クラブづくりが重要である。このことが、地域との協働を進めることにもつながり、一過性ではなく、継続性のある活動になる。片岡（片岡ほか、2010）や大藤（大藤ほか、2015、2016）が指摘しているように他の組織と連携、協働することの重要性と重なっている。

(5) また、活動を実践していく中で情報化と交通手段が大きな課題となっている。老人クラブの実態を広く社会に知ってもらうためには、情報発信が重要である。このためには老人クラブの ICT 環境の整備が急務であり、ICT の知識や経験のある高齢者が大きな役割を担う。また、地域の高齢者のコンピュータ・リテラシー学習を担うことも求められる。一方、交通手段に関しては、公共交通利用が課題である。運転免許証返納が進みつつある現在、会員個人の責任で行き来している現状を検討する時期である。

(6) 次世代交流が積極的に行われている。特に、地方部で活発に行われており、都市部においても望まれるところである。地域の伝統、文化、風習等を子ども達に伝える活動、子どもの見守り、子どもたちと共同で行う運動場・学校清掃などの活動がされている。高齢者と子ども、さらに青年期の若者との交流が地域の文化、風習等が受け継がれていき、地域の持続性に寄与する（山下、2005）。

(7) クラブ加入率が 20%にも満たない、また減少傾向にある老人クラブであるが、現実には地域協働に参画しているのは老人クラブである。加入していない高齢者も文化活動、体育活動等には参加している。老人クラブが彼らとの協働についてリーダーシップを発揮すれば、高齢者の自助、共助活動は一層推進される。この点については、今後とも研究を継

子ども・青年期の若者・高齢者の地域協働への係わりについて

続していく予定である。

### 参考資料

公益財団法人全国老人クラブ連合会・広島県連合老人連合会（2012～2017）,平成 24～29 年度中国・四国ブロック老人クラブリーダー研修会レジュメ.

### 参考文献

大藤文夫・鶴岡和幸（2015）, 地域福祉の担い手形成(3)―多世代協働の観点から―, 広島文化学園大学ネットワーク社会研究センター研究年報, Vol.11, No.1, pp.1-13.

大藤文夫・鶴岡和幸（2016）, 地域福祉の担い手形成(2)―呉市第 2 地区の見守り活動の実践から―, 広島文化学園大学ネットワーク社会研究センター研究年報, Vol.12, No.1, pp.1-15.

片岡由香・出村嘉史・山口敬太・川崎雅史（2010）, 官民共同の地域づくりにおける市民の自律的役割と活動の継続性に関する研究―近江八幡市を事例として―, 景観・デザイン研究講演集, No.6, December, pp.212-218.

山下裕作（2005）, 伝統文化が息づく地域社会の維持・継承, 農村と環境 / 農村環境整備センター 編, pp.76-87.

### 4.3 高齢者の地域協働への参加・参画について

高齢者のコンピュータ初心者へのコンピュータ・リテラシー支援システムの開発とその有効性を明らかにした。また、高齢者の地域協働、社会貢献活動について老人クラブの活動を調査研究対象として考察してきた。

以下に地域協働への参加・参画に注目して考察する。

(1) 高齢者のインターネット利用率は向上してきているが、60代の SNS の利用率は、50代のそれよりもかなり低い。これからの高齢者は ICT を活用し、自身の活動領域を広げていくことが想定される。SNS の活用等により他者との交流のみならず、高齢者が蓄積した知識・技術・経験を地域づくり等の社会参加に活かしていくことが重要である、高齢者自身が地域協働に係わることになる。このためには、高齢者が SNS を使うことができなければならない。

本研究で提案した e-なもくん 2.0 はインターネットとメールに特化した地域協働による支援システムであるが、SNS 活用支援システムに適用できる。それは、人的支援システムも含めて考えなければならない。特別な専門的な知識ではなく、インターネットや SNS についての知識や技量を有した高齢者が他者を支援する。

(2) 加入率が 20%にも満たない、また減少傾向にある老人クラブであるが、現実に地域協働に参画しているのは老人クラブである。老人クラブは、高齢者の介護予防、孤立回避など他者を支援する共助を地域と協働で行っている。



老人クラブに加入していない高齢者も文化・教養活動，健康・体育活動等には参加している。老人クラブが彼らとの協働についてリーダーシップを発揮できれば，高齢者の自助，共助活動は一層推進される。

また，土地で生活を営み，生活体験を通して知識や技術を蓄積してきた高齢者がその知識や技術を次世代に伝承する活動が行われている。特に地方においては積極的になされている。

ICTが一層進展する社会においては，高齢者が地域協働に参加・参画できる素地はあると結論付けられる。現実にはコンピュータ・リテラシーは向上してきており，老人クラブ連合会は地域協働を着実に進めている。もちろん，コンピュータ・リテラシーの質や老人クラブが抱えている課題は多くある。

## 5. 総括

現在，日本は人口減少，少子超高齢社会に至っているが，今後さらに進むことは明らかである。団塊世代が75才の後期高齢者に突入する2023年はすぐそこであり，自治体は多くの課題を抱えている。

地縁・ネットワーク型社会構築，人口減に合わせた都市環境整備，支援サービスの担い手等ソーシャル・キャピタルの醸成が急がれる。子ども，青年期の若者，高齢者にもソーシャル・キャピタル醸成が期待される。まさに，自治体は地域協働に期待するところが大きい。

本研究は，子ども，青年期の若者は地域協働にいかに関われるか，高齢者の社会参加のためのスキル支援，および地域協働での役割について考察した。

まず，子どもと青年期の若者の地域協働に関しては景観まちづくりについて，子どもの視点から参加できると考える。元々，近代都市計画においては，都市美は関心事の一つであった。ジョン・ウッドやカミロ・ジッテは都市の芸術性に関心を示し，実績を残している。彼らは眺望の美しさを重視した。ケヴィン・リンチは，都市は人々にイメージされるものであり，イメージされ易さを高めることが美しい都市の要件であるとした。市民の生活活動が都市美に反映されるものとする。本研究は，その部分に着目し，将来を担う子どもと青年期の若者の景観認知特性を実証データに基づいて明らかにし，地域協働活動への参加について考察した。その結果，子どもと青年期の若者は景観まちづくり参画に求められる知識や能力を有していることを明らかにした。そして，彼らの知識や能力を景観まちづくり活動に反映できれば，将来とも継続性のある地域協働になる。

次に，高齢者に関してはICT社会におけるスキル支援について，また社会貢献活動参加について注目した。高齢者は個人では社会貢献活動に参加することには躊躇するが，複数人であれば，敷居は低くなる。実際に，シルバー人材センターや老人クラブ連合会に参加し，彼らの活動には目覚ましいものがある。

スキル支援に関しては地域協働によるコンピュータ・リテラシー支援システムの提案とその適用性を明らかにした。社会貢献活動に関しては、老人クラブ連合会の活動実態を明らかにし、高齢者の社会参加と地域協働について考察した。

その結果、コンピュータ・リテラシー支援システムはコンピュータ初心者にとって大変有効であることを示した。また、老人クラブは、地域協働の有力な団体であることが分かった。反面、大きな課題を抱えていることも明らかにした。

さらに、子ども・青年期の若者と高齢者の二者間での共同行事が多くなされていることも明らかにすることができた。子ども・青年期の若者と高齢者間の協働についてまとめる。

まず、子どもの景観に対する知識や認知能力は祖父母の存在の大きいこと、また青年期の若者の知識や能力は児童期に形成された部分が大きいことを考えれば、高齢者が経験してきた地域の伝統、文化、慣習に関する豊富な知識や技術を子どもや青年期の若者に伝える場の一つが地域協働になる。そして、子どもや青年期の若者は受け入れる能力を持っている。

一方、ICT 社会における高齢者は SNS を活用し、自分が持つ知識、技術、経験を若い世代に伝えることにより地域貢献活動、さらに地域協働に参画することができる。すでに、老人クラブはその地域において次世代交流も積極的に取り組んでいる。

これらのことを考慮すれば、社会的サービスの受け手が地域の課題を協働で解決を目指す活動することができる。たとえば、伝統芸の伝承はこの一つであろう。景観まちづくり活動も子ども、青年期の若者、高齢者が加わることで住みやすいまちづくりに貢献することになる。

以下、各章・節で得られた結論を述べる。

最初に 1 章では地域協働や市民協働に関する文献調査を通して地域協働の理論的枠組、2 章では従来地域協働のサービスの受け手側であった子どもや青年期の若者および高齢者の地域協働への係わり方について考察した。地域協働は継続性が重要であり、人口減少、少子超高齢社会において将来の担い手である子ども、青年期の若者たちの社会参加・協働の意識と能力を育てることが重要であることを指摘した。また、高齢者に関しては、高齢者自らが社会との係わりを高めることが求められることを指摘した。

3 章では、子どもの景観まちづくりへの参画について検討している。子どもが景観まちづくりに参画するためには、子どもの景観認知特性を理解しておくことが重要である。都市景観は、名勝地、旧跡等といった眺めだけではなく、その都市で暮らす人々の日々の生活情景も現出されるものであり、大人が抱く眺めを中心とした都市景観ではない都市景観を子どもたちに期待している面もある。もし、そうであれば、子どもが景観まちづくりに参加、参画する意義は大変大きい。

特に、3.1 では子どもの都市景観認知の特徴を検討した。子どもを対象として好きな風景を題材とした絵画コンクールを実施し、その中で描写した題材を選んだ理由について自由記述を求めた。その記述内容をテキストマイニングによって分析し、子どもの都市景観

認知特性を明らかにした。

子どもは、都市景観構成要素として広く知られている事物、と同時に自宅近くの日常生活の中での祭り、花火、夜市など地域の文化、風土をも都市景観として認知している。都市景観構成要素は建造物、景勝地といった視覚に訴えるものが議論されている場合が多いが、地域の風土、文化、伝統、風景の保全が求められるものである。この点に関しては、子どもの視点は重要な示唆をしていると考える。

また、建造物が本来持っている機能や意味も都市景観構成要素として認知している。たとえば、橋梁、鉄道・駅舎、道路等の人と人を繋ぐという視点は、学校や日常生活の中での学習が大きな影響をしている。特に、記述文にも多数登場する両親、祖父母の影響は大きい。

子どもの成長に伴い景観に対する視点も子どもから青年そして大人へと変化していく。身近な景観まちづくりに対する子どもの視点は重視すべきと考える。たとえば、学校周辺の街路の花壇整備や世話、さらに浜辺の清掃活動など多くみることができる。その参加活動を提案型に切り替えていくことは今後の課題である。

提案型の景観まちづくりを実践するためには、総合学習の場の活用、また実践をリードしてくれる地域協働の役割が重要であり、今後の課題である。

3.2 では、自分が住む町の樹木のあるすばらしい風景を題材とした絵画コンクールを行った。絵画題材となった樹木を選んだ自由記述データ分析から明らかになった小学児童や中学生徒の樹木景観認知について考察した。

子どもは、樹木景観について多様な視点場および視対象を指摘している。大人が指摘する樹木形や歴史等についての意見は少数であり、身近にある樹木に対する景観保全を指摘している。

次に、小学低学年の子どもは日常的な行動範囲の中での樹木に対する景観認知であり、高学年になると非日常的な行動範囲の中での樹木景観も認知している。中学生になると風景の中での樹木景観認知となっている。

また、子どもの樹木景観認知は小学校から中学校への成長とともに変容していく。日常的空間から非日常的空間の中での樹木景観認知へ、さらに活動的空間から心理的空間での樹木景観認知へと変容している。

上述したように子どもの樹木景観認知と認知構造は、子どもの空間認知能力の発達によってその領域が点、線、面へと変化、分節されるという発達心理学や認知心理学とも合致する。

以上のことを考慮するならば、子どもが市民協働による景観まちづくりに参画することも現実的である。小学低学年は日常的空間での樹木景観認知であり、地区内での重要景観樹木選定に、高学年、中学生となれば非日常的空間での樹木景観認知となり、都市域での重要景観樹木選定に参加できる。小中学校との連携、小中学生を対象としたワークショップ等を通して行政資料にも登録されていない新たな樹木発見も期待でき、景観まちづくりに子どもの視点を反映することはまちづくりの側面からも社会的意義は大きいと考える。

さらに、このことは子どもの地元理解の促進、地元愛、景観学習にもつながり、学習効果も大きい。

3.3 では、都市は、基本的には、働く（学ぶ）・憩う（遊ぶ）・住むの三つの生活目的に対応して活動している。このことが都市景観、さらに風景として具現している。本章では、故郷を離れて暮らす青年期の若者が抱く都市イメージと美しい風景について記述したテキストデータにテキストマイニングを適用して青年たちの都市景観イメージと景観認知構造の特質を明らかにする試みを行った。

故郷を離れて暮らす若者が抱く都市イメージは、暮らし始めて間もない時期には故郷のイメージと比較しながら形成されていき、新鮮な思いがイメージに表れている。特に、都市の経済の部分がイメージに鮮明に表れている。都市の働く側面である。しかし、年月の経過とともに彼らの行動範囲も拡大し、多くの体験を積み重ね、その都市のイメージも変化している。彼らがオシャレ、ロマンチックのような言葉で表現するように都市の憩う側面がイメージされるようになる。

一方、住む側面に関しては都市の環境についてイメージされているが、都市の歴史、文化、生活習慣が具現された都市景観に関するイメージは見受けられない。

景観評価構造からは、他地域から移り住んで来た若者たちとその都市で生まれ育ってきた若者たちの間には非日常性と日常性とに違いが認められる。観光で、ビジネスでやってくる外来者にとっては非日常性が評価される。娯楽街、景勝地等の夜景も都市の一つの景観であり、若者たちもそのことを認知している。

住む側面に関しては、環境については都市景観として認知されているが、都市の歴史、文化、生活習慣については都市景観として認知されていない。このことが都市景観の荒廃を招く可能性が高い。中国では近代化が急速に推し進められ、近代都市における文化、生活が一律となり、都市のアイデンティが失われつつある。小中高等学校での自分たちのまちに関する学習は重要であり、同時に高等教育機関でのまち学習が必要である。

4 章では高齢者の社会参加と社会貢献について考察した。

4.1 では、高齢者が自信を持って ICT 社会に参加するためのコンピュータ・リテラシー支援システムを提案した。一つは、中高齢者向けインターネットソフトウェア e-なもくん 2.0 を開発、Web 上に公開した。このソフトの特徴は、マウス入力とした点と、コンピュータユーザー向けのトレーニングソフトウェアとして開発した点にある。二つ目は、開発したソフトの有用性を検証するため、地域協働による実証実験を行った。その結果、e-なもくん 2.0 は高齢者にとって非常に適切かつ有用なツールであると結論付けることができた。三つ目は、この支援システムはハードだけではなく、ソフトの側面に特徴がある。大学、高齢者で組織された NPO、生涯学習センターの三者の協働であることがシステム開発に有効であった。

また、Web ページの閲覧と文字の入力はマウスで行うことができるため、障害者の利用にも容易に拡張できる特徴を持っている。例えば、画面拡大機能とマウスを使用すれば、視力の弱い人も容易に利用できる。さらに、提案したシステムは、SNS 支援システムにも

拡張できる。

4.2 では、高齢者自らが地域と連携して社会貢献している実態を調査、分析した。特に、地域の各地区で活動している老人クラブを調査対象とした。

老人クラブの活動は、動的な活動と静的な活動、生活文化に関して能動的活動と受動的な活動、さらに学習に係る活動、慰労・慰安に係る活動に大別できる。高齢化率の低い地域の老人クラブでは動的・能動的活動が特徴的であるが、高齢化率が高く、地域の中心部から離れた老人クラブは静的・受動的活動に特徴がある。

老人クラブの情報化は急務であると認識されている。仕事でコンピュータが当たり前といった世代が、老人クラブの運営を担うことになれば、情報化は急激に進展し、老人クラブの地域協働は格段に進むことになると期待される。

さらに、老人クラブは一層地域に密着した地域協働、社会貢献を目指しており、課題も指摘されている

老人クラブが公助に依存することなく自助、共助を進め、さらにまちづくりの主役になるろうという新たな活動を進める中で、魅力ある老人クラブづくりが重要である。このことが、クラブ加入者が増加し、地域との協働を進めることにもつながり、一過性ではなく、継続性のある活動になる。

クラブ活動にとって交通手段は大きな課題である。都市部では比較的公共交通利用が容易であるが、都市部を離れると公共交通利用には困難さが伴う。運転免許証返納が進みつつある現在、会員個人の責任で行き来している現状を検討する時期である。

最後に、子ども、青年期の若者、高齢者の地域協働への参加、参画の今後の展望について示し、本研究を締めくくる。

子どもたちは、学校の中では先生や生徒同士（同級生であるかもしれない、上級生であるかもしれない、下級生であるかもしれない）間の連携の下でさまざま行事を実行している。運動会や文化祭では企画、実行といった学内協働を学び、体験をしている。また、学外では学校以外の団体などが行う活動、たとえば祭り、自然体験活動、文化・芸術活動、ボランティア活動など子どもの参加の促進と参画の機会を広げていくことを通して子どもがまちづくりの一端を担うことが進められている。景観まちづくりはその活動の一つである。子ども達に地域愛を持ってもらうことが、地域の存続に大きな影響を及ぼすと考える。

また、ICT 社会においては、情報通信機器の活用は高齢者自身の QOL 向上につながる。現実には、医療相談、健康相談が Web 上で実施もされている。テレビ電話も普及し、日常的に使用されている。今、高齢者の孤立が大きな問題であるが、テレビ電話があれば、たとえ離れていても身近に人がいるという安心感がある。このように日常生活において物ばかりではなく、サービスもインターネットとつながる IoT が現実であり、その進歩は加速するばかりである。高齢者自身も関心を持たざるを得ない。どのように支援できるのか。また、公務員の定年が 65 才に引き上げられれば、前期高齢者も就業を通して社会参加、社会貢献の機会は多くなる。一方で、後期高齢者の社会参加はどのようになるのであろうか。

さらに、グローバル社会の中、外国人と共生するようになる。外国人も地域協働に係ってくれれば、新しいまちづくりに繋がっていくと考える。そこで、外国人の社会参加はどのようなであろうか。

上述したように子ども、青年期の若者、高齢者の地域協働への参加、参画について研究しなければならない事項は多くある。本研究は、その一部分を取り扱ったものであり、今後の研究に期待する部分が多い。

最後に、中国大連市の大学生を対象とした都市景観及びイメージ分析結果を通してまとめてみる。現在の中国では、地域協働、または市民協働に対する意識が高くはないのが現状である。地域のまちづくりに関しては、政府が主導的にやっているのも事実である。日本と同じく、少子高齢社会の中、子どもや青年期の若者たちの社会参加、さらに参画することが必要となってくる。その知識や能力の育成もますます重要になる。